

ほのぼのちんじふ

かのえ

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

よくあるちんじふとよくいるていとくのはなし※世界観がおかしいです

目次

に	いち
13	1

いち

彼が指揮する艦隊はまさに無敵とも言えた

誰もが進めなかった海域を楽々と攻略していき、常に最前線で戦い続ける、そんな艦隊を彼は指揮していた

海軍の誰もが彼を有能だと認めた。同じく、彼の指揮下に入っている船——艦娘——達からの信頼も厚い（一部を除く）

当然ながら、彼がどのようなにして誰一人沈没させることなく作戦を遂行するのかわかりたがった

ありとあらゆる人が司令部室に出入りし、彼のすべてを真似しようとした
しかし、当の本人はこう言うのだ

「特別なことはいしませんよ。ただ、危なくなったら帰るだけです」

それが難しいのだ、とある人物はいう。艦娘も生きている、生きている以上無理をしないでしまう。「大丈夫？」と聞かれて素直に「正直きついです」なんて答える者は数少ないだろう

彼女らの疲労や損傷を見極めるのはとても難しいのだった

ならば、どうやって見極めているのか、それを聞く

「普通に彼女らと触れ合っていれば分かります」

と言うが、よく考えてみよう。軍人は基本男性で、艦娘は女性だ。しかも、提督が一人に対して艦娘は数多い。そんな中で生活するのでさえ辛いというのに触れ合えというのか

軍隊生活の中では男性ばかりが周囲にいた。そのためにそこいらの道行く女性ですら美人に見えてしまうというのだ。そんな彼らが会話だなんてハードルが高い。高すぎる

結果、誰もが収穫なしに自らの持ち場に戻っていくのだった

「あ、お土産にどうぞ」

大量の袋詰めされたクッキーを片手に

ほのぼのちんじふ

いちわ

ていとくつてなにももの？ その一

「お疲れ様」

「なんでいつも俺のところにくるかなあ。他にも優秀な提督だっているのにさ」
 「今は優秀な彼らでも、必ず一隻は沈没させています。貴方が異常なのよ」

はい、お茶。と秘書艦である戦艦「陸奥」が湯飲みを机に置く

ここは提督の部屋、というか執務室。だというのにここには艦娘達の私物（例を挙げ
 るならば戦艦「金剛」やその姉妹たちのお茶の道具、正規空母「赤城」「加賀」専用のお
 櫃やしやもじ等）が散在していて彼の机は隅っこに追いやられている。哀れ

「ていうかさあ、提督う。ここに来る前は本当に何やってたのさ。軍人じゃなかったん
 でしょ?」

雷巡「北上」が季節はずれの炬燵に包まりながら言う。春になったというのに炬燵が
 出されているのは北上の姉である軽巡「多摩」がどうしても、と駄々をこねるからだ

事実、彼女がここにいるときは炬燵で丸くなっている。猫じやないと言っている彼女
 であるが、猫っぽいとは誰もが思っている

「まあ、秘密ということで、ね。言っちゃうと色々と厄介なことになりそうだし。約一名
 のせいで」

「約一名……?」

「那珂だよ那珂」

よつこらせ、とそう言いながら椅子から立ち上がる提督（年齢不詳）

「じゃあ、そろそろ帰るかあ。夜も遅いし、夜の巡回はしばらくうちに来ないし」

「はいはい、お疲れ様でした」

「陸奥は暗闇でこけるなよ？」

「余計なお世話よ」

不運ばかり続く彼女に声をかけて、じゃあ戸締りはよろしくと言って帰る提督（住所不明）

「でも本当に気になりますね」

「ええ、本当に」

「食うのか喋るのかはつきりしろ二人とも」

赤城、加賀の二人は夕飯も大盛り食べたというのに夜食も食べている。エンゲル係数がマツハでアレなのはこの二人が主な原因だろうか

ツツコミを入れた戦艦「長門」は陸奥の姉であるが、おちついた女性である陸奥とは逆に勇ましい雰囲気を漂わせている

今現在この部屋にいるのは第一艦隊、基本敵が現れたときに瞬殺していく高火力部隊である

旗艦は北上。続いて大井、長門、陸奥、赤城、加賀の順番である。この雷雷戦戦正正はオーソドックスな編成で、これでは対応しきれない事態になったときは少しずつ変更を加えている

「彼がここに来て最初に指揮下に入ったのって電よね？」

「大井っち？」

ふと、呟いた大井。表では提督にいい顔をしているというのに艦娘だけになると毒を吐く彼女（しよっちゆう猫がはがれる）が提督に興味を示すのは少ないのだ

「あの子なら何か知っていてもおかしくないかも知れないわ、北上さん。そして弱みを」「あ、それが本音か」

北上は苦笑する

「では行きましょう北上さん」

「えっ……やだよ。駆逐艦ウザいし」

「そうですか、なら陸奥さんが行ってください」

「どうして私に振るのよ私に」

「だって今の秘書艦だし、何かと理由がつけやすいでしょう？」

陸奥は心の中で「あ、北上と一緒にいけないなら行かなくていいくらいの事象なんだ」と呟く

「仕方ないわね。じゃあ行って来るわ」

執務室を出て、駆逐艦「電」がいる部屋へ向かう。第六駆逐隊の四人、即ち「暁」「響」「雷」「電」がいる部屋は少し執務室から遠い

これは、まだ幼い容姿の彼女らが夜遅くまで仕事をしている事もあるその騒ぎで起きないように配慮された結果であるが、それを暁に言うとな怒られるので提督はぼかして伝えている

部屋の前に立ち、ノックをする。すると、ドアが開けられて陸奥の胸より低い位置に頭が現れた

「こんばんは」

「はわわ、陸奥さん！　こんばんは、なのです」

ちようど出てきたのは用事があった電であったが、どうぞどうぞと招かれたために陸奥は部屋へと入った

「あら、ごきげんよう」

「やあ」

「こんばんは！　何か用事？　あ、お茶淹れてくるね！」

テレビを見ていたのか、ソファで寛いでいたほかの三人が挨拶をしてくる。年上ぶつているのが暁、簡潔だったのが響、そして何かと世話を焼きたがる雷

「いえ、いいわ、雷。用事があるのは電ね」

「私、ですか？」

「提督のことなのだけど」

「なになに！ 司令官のこと？」

雷が食いついてくるのを苦笑しながら陸奥はこれまでの経緯を話す

「司令官はしょっちゅうクツキーを持ってくるからてつきりそういう仕事だと思っ
たけど」

「響の言うとおり、私もそう思っていたわ。でもどうも司令官は女性の扱いが上手なの
よね……。ひよつとしてそういう」

「絶対無いわ、雷。だってこの暁をお子様扱いするのよ？」

それは本当にお子様だからね、とは陸奥の心の言葉

「そうですね、別に口止めされてませんし、言ってもいいのでしょうか？」

「電は何か知っているの？」

「はい、でもちよつとだけです」

電は回想する

『こんにちは、俺が今日から君の司令官だ。よろしく』

『よろしく、なのです。えっと、司令官さんは軍人さんじゃないのですよね？』

『うん、そうだよ』

『どうしてここに?』

『うーん、知り合いの勧め、かな? あとはちひろさんから……』

『ちひろさん?』

『ああ。いいか、電。この世には鬼や悪魔を超える存在がいるんだ。覚えておけよ?』

俺は彼女にお金を搾り取られてきたんだ。軍人は給料がいいからね、来たんだよ』

『そ、そうですか……』

「といった感じで、その『ちひろさん』という人にひどい目に遭わされてたらしいです」

「お金を搾り取られる……もしかして、司令官の彼女!？」

「いや、司令官は女性に貢ぐような男じゃないよ、雷。そういえば私も」

『響だよ。その活躍ぶりから不死鳥の通り名もあるよ』

『よろしく、響。……うーん、こっちの響は落ち着いた感じか』

『どういうことだい?』

『いや、俺の知り合いに同じ名前の女の子がいてな。南国生まれの元気な子だったよ。』

『今なにやってるかなあ』

『という感じで』

『二股!?!』

「いいえ、多分違うわよ雷。あの男に二股できるような甲斐性あるわけないじゃない。私のようなレディを子ども扱ひするんだから」

そういうところが子供っぽいよ、とは陸奥も言わない

「そうよ！ 出会ったとき司令官ったら本当にひどかったんだから！」

『暁よ。一人前のレディとして扱ってよね！』

『そうかそうか、ほらクッキーだ。妹たちと食べなさい』

『むー！』

『あはは可愛いな。ほら、これもあげよう。試作品クッキーだ。金から練成して作ったんだぞ。凄いだろ』

『嘘でごまかさないの！』

『金から作るって嘘にもほどがあるわよ』

陸奥はあきれながら言う。だが、しかしそれと同時に思い当たることがあった

「でも変ね、確かに彼は毎日のように、というか毎日クッキーを持つてくるわ。余ったからって」

「今日も沢山抱え込んでここに持つてきたのを朝見たよ」

「響ちゃんも見たの？ 私も昨日みただのです！」

うーん、と考え込む一行。実家がお菓子屋だとしてもそんだけのクッキーを普通余ら

せないだろう、しかも一年以上毎日

「謎が深まったわね」

しかし、ふと陸奥は思い出す

『まあ、秘密ということ、ね。言っちゃうと色々と厄介なことになりそうだし。約一名のせいで』

『約一名……?』

『那珂だよ那珂』

軽巡「那珂」が彼の素性に関係あるのだろうか

「どうしたのです?」

「いいえ、ただ、さっき提督が前職が那珂に関係があるみたいなのを言ってる」

「那珂がかい? ただアイドルになりたがっているだけで……アイドル?」

「どうしたの響?」

ふと、何かに気がついたのか部屋においてあったパソコンに向かい、何かを調べだす響。そして出てきたのは

『765プロアイドル我那覇響? これがどうしたの?』

「ずっと引つかかっていたんだ。私と同じ名前で南国出身の少女」

「でもそんな人と提督が知り合い……?」

続けて響は検索をする

『アイドル　ちひろ』……出てきたよ。『シンデレラガールプロジェクト』、それを進める芸能プロダクション。そしてその事務員の千川ちひろだ』

さつき電が言っていたよね、ちひろという人に金を搾り取られていたって

「そして那珂が煩くなる、そんな前職。つまり、司令官は昔芸能関係で仕事をしていたに違いない」

な、なんだってー！　と四人は驚く

「……響、もしかしてさつきの765プロってやつに『やよい』とか言う女の子いない？」
「調べてみるよ……いた。どうして、雷？」

「私も司令官に会ったときに言われたの。『元気で家庭的だな……やよいみたいだ』って」

と、いうことで陸奥がこれまでのことを整理してみる

「提督は昔、芸能関係の仕事をしていた。特にトップアイドルを輩出し続ける765プロと親密で、そして同じ業界の千川ちひろという女にお金を搾り取られた、と。大量のクッキーの謎が解けないけどこんなところかしらね？」

「女性アイドルと関係があったなら女の子の扱いが上手くても領ける」

「響、司令官は女性の……」

「暁ちゃんは黙るのです」

「はい」

最近電が怖いわ、と暁は呟く

ということ、この考察を執務室に持ち帰る

「ただいま」

「お、陸奥。何かいい情報聞けたか？」

「ええ、長門姉さん」

「こつちも色々をわかったよと、北上も言う

「あれ？ どうして」

「大井つちが提督の上司をおど……説得したんだよ。ちやうど資料を持ってきてさ、そのついでにちよろろつと話を聞いたのさ」

相変わらず大井は、と額に手を当てて溜息をつきながら彼女らの話を待つのだった

に

「こんばんは、資料を持って……ん、彼は」

「帰りましたよ、元帥。わざわざ来られなくとも彼に」

執務室に現れたのは彼、提督（大将）の上司である元帥だった。彼女は女性ながらもその階級に上り詰め、今では海軍にいらなくてはいらない存在となっていた

何か特別な会議があつたらしく、彼女がその後様々な関係部署に出向いている姿が見られていた

執務室にいた艦娘の敬礼に返礼した元帥。彼女は数枚のクリアファイルに挟まった書類と、小さな箱を手にかけていた

「いやいや、私は彼のおかげで助かっているからね。これくらいは」

「それでも仕事量は彼よりも」

「いいや、長門君。仕事量は確かに彼のほうが少ないかもしれない。だが、彼は机上のそれよりも遥かに有用な事をこなしているさ」

「有用なこと……？」

元帥は彼を高く評価していた

彼女は持っていた書類、そして箱を秘書艦がないということで第一艦隊旗艦の北上に渡し、部屋から出ようとした

「ふふ。では私は」

「少しお待ちを、元帥」

ゆらつと立ち上がったのは大井。彼女はうつすらと笑みを浮かべながら元帥の元へと歩み寄った

不思議そうな顔をしながらも「お耳を」と言われ、耳を貸す元帥。なにやら大井がごによごによと彼女の耳元で言うと、彼女は急に表情を一変させて狼狽した

「な、な、大井君！ どうしてそんなことに思い至ったのかね!？」

「うふふ、さて。貴女達も気になるかしら？ 私が彼女に言ったこと」

「大井君！ 誤解、誤解だから!」

顔を真っ赤にして慌てふためく元帥に誰もが疑問符を浮かべる中、大井は悪そうな笑みを浮かべながらこう言うのだった

「このことをあまり知られたくなかったら、提督のこと、少しお話して下さいな？」
このとき誰もが思った。大井をあまり敵に回したくないな、と

ほのぼのちんじふ

いちわ

ていとくつてなにもの？ その2

「私を脅すなんて、君は命知らずだね」

じとーつと大井を見つめる元帥。うふふ、と誤魔化す彼女

「まあいいさ、後で彼はたっぷりお仕置きだ」

「楽しみですか？ 元帥」

「ばっ、誰が楽しみだなんて！」

自分から口を挟んでおきながらも、早く彼の過去について話して下さいと催促する大

井

「知っている、とは言っても少しだけなんだが」

「それでもですよ」

そうだな、と言いながら彼女は胸ポケットから携帯端末を取り出す。少し、パソコンと通信ケーブルを使わせてもらえないか？ と言い携帯端末をパソコンに接続する

「君たち、ポケモンバトルに興味はあるか？」

『そしてこちらからやってくるのは、なんと——』

「な!？」

「う、嘘、提督!？」

大井も、そして北上も驚く。そう、レッドの反対から現れてきたポケモントレーナーは、今よりも若干幼さをみせる風貌ながらも間違いない、彼女らの提督だったのだ

一通り動画を見終わった。結果は提督の辛勝。突然最終進化形態と言われていたサーナイトが更に進化しての勝利だった

「いやいや、提督の名前と同じ人が強いトレーナーにいるな、とは思ってたけどさ。まさか本人だとは思わなかったよね」

「そういいながら陸奥に話す北上

「頭が痛くなるわ」

「どうしたのさ」

「提督がポケモントレーナーだったのは百歩譲って良いとしましょう。でも、元帥がそんな動画を持ち歩いているって、それってもしかしなくても……」

「陸奥、それ以上は、よくない」

長門は止めた。そんなことがあってはならないのだ。きちんとした規律があるというのに、そんな、軍の中で上司が部下に——

「早々にどうかしないと、問題は大きいわね」

「だから赤城、食べるか話すかどっちかにしろ」

そして陸奥は自分の知りえた情報を話す

「あー、ますます謎だわ。提督」

「北上さんの言うとおりね。芸能関係者で、ポケモントレーナーで、山のクッキー」

「まあいいじゃないですか、大井。彼のおかげでお菓子には困りませんし」

赤城の言葉にコクコクと頷く加賀。貴女たちは本当にそればかりね、と呆れながら陸奥は北上から書類などを受け取る

「どういう書類だ？」

「そうね、長門姉さん。大体は支給される資材や、新装備の提案、そして……あら？」
書類をぺらぺらと捲っていた陸奥であったが、あるところでぴたりと動きを止めてしまった

「どうした陸奥？」

「あ、あらあら。あらあらあら」

ぺっぺっぺとその後数枚捲ってみるものの、その内容はどれも先ほどの紙が幻ではないことを示していて

「ちよつと、皆。これ、見て頂戴……」

それでも信じられない。ということで他の子たちに確認してもらおう

「なんと！」

「これは……」

「う、うふふ……」

「え、どれどれ。へ？」

「なんとということでしょう」

長門、北上、大井、赤城、加賀の順番で読んでいったものの、それは幻なんかではなく、現実だった

（あの噂が本当だったなんて……嗚呼、明日は絶対荒れるわ）

陸奥は嘆いたのだった

そして翌日、いつも通り現れた提督に無言で書類を突き出す陸奥。それを彼は受け取り、一通り読んで

そして、彼の指揮下の艦娘をすべて招集するのであった

「皆、急に呼び出してすまないな」

壇上上がる提督。彼の目前には百を超えるほどの艦娘達が整列して彼の言葉を待っていた

集まってもらった理由を言わずに、まず諸連絡を始めた彼の姿をぼうつと見つめる軽

巡「神通」

彼女は電に次ぐ古参で、全く仕事に慣れていなかった頃の彼をずっと補佐していたことがあり、このように重要なことを後回しにするときは彼が嫌がっている、もしくは面倒な自体が起きているというのをなんとなく分かっていた

先ほどまでの天龍型姉妹との会話が脳裏に浮かんだ

『緊急招集か、前回の召集からそんなたつてねえぞ』

軽巡「天龍」がどこか不安そうな表情を浮かべながらそう言う。前回の召集のときは軍全体で噂になるような事件、すなわち極めて強力な敵が見つかったというそれだった前回の大規模出撃からそんなに日が開いていない。資材も心許なく、もしこの状態で攻撃を受けたならば出撃すらできずにやられてしまうだろう

無敵艦隊と言えども、燃料が無ければただの置物に過ぎない

『でも変ね、敵基地が見つかったという話も出ていないわ』

軽巡「龍田」もほわっとした表情の中に不思議そうな色を漂わせる。ただ、侮る無かれ。彼女はこの場にいる艦娘の中でも1, 2を争うほどには危険な性格をしている

『敵ではなく、軍の中で何かあったのでしょうか』

『そうねえ、神通ちゃんの言うのも一理あるわ。何か重要な会議が上のほうであつたらし』

『軍法会議があつたとしても言いたいのか？ 龍田は』

『でもうちでそんな重大な事件を起きてないわねえ』

しばらく額を突き合わせていたものの、答えは出ることが無かつた

会議、そして全員を呼び出すような出来事。そして時期

今の時期は調度大規模先頭が終わり、それに追われていた軍内の非常事態における役職などが正常になるそれと重なるのだ

もしかするとそれにあわせて提督が異動……そんないやな想像を神通は頭からどける

『神通ちゃん元気がないねえ。ほら！ 那珂ちゃんスマイル！』

『ふふ、ありがとう。元気が出るわ』

『二人とも時間よ』

何かと濃い姉妹に挟まれながらも、神通は提督の言葉を待つのだつた

「——で、58（ゴーヤ）と168（イムヤ）、そして19（イク）は夕方にオリヨールだ」

「えー！ またオリヨールう？」

「いつも言っているだろ？ ゴーヤ、補給路を断たれ、おなががすいてるときにチクチク攻撃されたらイライラするだろう？」

「そうです、ご飯は大事なんですよ58さん！」

提督はイイ性格していますよ、と赤城は続ける

「頼む」

「むー、仕方ないでち。ゴージャ、了解しました」

「イムヤ、了解よ」

「了解なの！ あとでイクたちにご褒美お願いするの！」

「はいはい。で、残った8（ハチ）、401（しおい）、まるゆは哨戒任務で」

と、ここまでで各種連絡は終わりかな、と彼は言う

「えー、と。まあ、ここからが本題なんだが」

全員が彼の言葉に集中する

「君たちも風の噂で知っているだろう？ 更なる強化、そのための道具。それが、うちに

着た」

ざわめきが起きる。嘘、本当にそんな道具が？ という声と、その道具が何かを知っ

ているがゆえに頭痛を覚えるもの、そもそも強化に興味が無い者

だが、続けて発せられた言葉に彼女らは更に驚くことになった

「まあ、それだけじゃあないんだ。うーん、そう、誤解しないでほしい。決して俺から頼み込んだわけではなくそもそもその仕様で、決してセクハラじゃないから、うん」

——その道具、結婚指輪なんだよ

一瞬の静寂、そしていつせいにあがる声

「ちよ、テートク！ それつてもしかして」

「そうだよ金剛、噂にあつただろう？ 提督と艦娘が擬似結婚するという通称ケツコンカッコカリ。アレと戦力増強が結び佃なんて想像もしていなかった」

とりあえず落ち着いてくれ。ケツコンカッコカリをした後どうなるかについて説明するぞ、と言われてすこしざわついてはいるものの、先ほどよりは幾分おとなしくなった

「簡単に言うなれば、更に強くなる。不思議フィールドでも使うのか知らんが耐久が上昇して、運があがる。そして一番大きいのは」

——燃費だ

戦艦たちがいつせいに興味を示す。もともと、運が向上するということでどこかの不幸姉妹に代表される不運組が思いつきキラキラした目で提督を見つめ、否、睨んでいたが

「上の実験結果によるとおおよそ15%燃料、弾薬の消費が少なくてすむらしいぞ」

比較的重い艦の運用がしやすくなるのは利点だ、と彼は呟く

「でも、強くなれる代わりにだな。まあアレだ。結婚式的なのをしないといけないんだ」

できれば練度の高いやつが相手になってくれれば上にどうして彼女を選んだのかって言う報告がしやすいけど、強制はしない。君たちの間で誰か一人決めておいてくれ以上、そう言つて彼は逃げるようにその場を後にした